

地方公署 再び断念! 愛子⁴さま 友達の輪に入れない 雅子⁴²さまの 心配

週日早朝補習 季佑ちゃん¹⁸ 詰め襟姿

女性自身

10月31日号 特別定価 340円 光文社

2千万円でも億ション級! 地域力、構造力、リフォーム力チェックリスト²⁰ 絶対損しない中古マンション鑑定法 激笑対談120分! 同居カレは17歳年下 恋人候補は3~4人 假屋崎⁴⁷善×カルセル 麻紀⁶³ 年下恋人自慢^{対決}

ヨシ³⁴様5kg痩せた過密ロケ^{詳細} ● 細木数子^{日ハムに優勝なし} 今年の大予言的中率

向井亜紀⁴¹ 海外で極秘代理出産 日本人実情 54組の

昭恵^{総理夫人}愛用ジーンズは地元山口特注品^{2万8千円} ● 寺島^{しのぶ}路上ハグ^{子持ち熱愛告白}

赤西仁²²引退結婚留学 僕が本当に追いかけてたい夢



香取慎吾²⁹ 本人全プロデュース! 写真展*裏側、実況グラフ

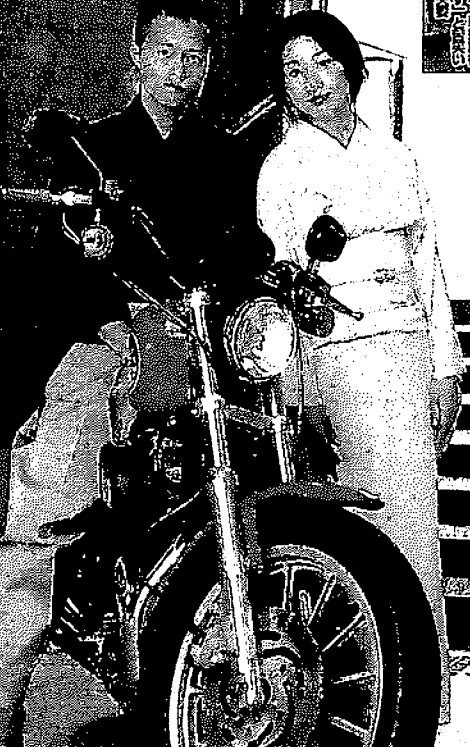
要される人になる方法

特別付録 1日2分! 見るだけ 視力がよくなる 近視老眼 劇的改善 カード

秋ドラ美男⁴ 藤本高史³⁷、藤山良太³⁷、小出恵介³²、塚本高志³⁷

料金、割引サービス、使い勝手、各社を徹底比較 本意得するケータイ²選び 炊飯器におまかせ¹ 5分でシャツがピシッ! アイロン達人¹ 12 星座 ラッキー秋の食材カレンダー

「伝統を絶やさず、進化させていきたい」
 回京「和傘」「時絵」守モノ20代、30代の
 若者たちがフライトを持って憧れご仕事は
 この日本の「古都」にあつた。



和を受け継いで 働く誇り

モダンなデザインや素材を使って「伝統に込める守モノ」を提案する石塚良雄（右）

生まれは和歌山県新宮市。地元の高校を卒業してカナダに留学し、帰国後は、新宮市役所観光課に勤務していた。ある年の夏、留学時代の友達から、キャンプにグループで連れてきた一人の女性に西堀さんは恋をしてしまった。その彼女と交際を進めるうち京都の彼女の実家を訪問、そのとき偶然にも巡りあつたのが和傘だった。

自分が日本文化を知らないかを痛感していたんです。各国からの留学生に、歌舞伎やお茶の話を聞かれても全然答へられない。そんな背景もあって、日本人として「伝統」を伝える仕事に携わりたいなと思つていました。



結婚当初は、新宮市役所に勤めながら、週末は、和傘作りの技術を義理の祖母に教わるため、新宮市から京都まで車を5時間走らせた。「一見で覚えろ」とばかりに何も教えてくれない祖母。しょうがないのでVTRを撮って何回も見直しながら「傘作りの技」を覚えた。だが、ナイロン製の傘が全盛の今、商店街の傘屋さんは姿を消し、和傘はまったく需要のない産業となった。「誰がせてくださいって行ったら、「そんなん食べりゃいけん」と両親はもちろん、家内の実家からも猛反対される始末。でも僕は、ネット販売の可能性を感じていたし、祖父の「日吉屋を頼む」という遺言。この言葉に日本人の使命を、強く感じました」

株式会社 日吉屋 ☎075-441-6644



お寺に紅葉を料理、「秋の京都」にはお飾りも満載だ。しかし、今の若者たちが、優も、植れ、を感じているのは、京都がずっと守つてきた「匠の技」であつた。

「幼いときにはふだん何気なく見ていたお寺も、33歳という年齢になつてみて最近ようやく興味を持つようになりました」

と話すのは、團扇や扇子を扱う老舗、「小丸屋」の住井志帆さん。京都に生まれ育ち、地元大学へ進学。在学中にアメリカやカナダへ短期留学して来たが、まだまだ物足りなかつたようだ。

「中学生のころ、海外のロックが大好きで英語に興味を持ちました。「いろいろな国の人が話してみたい」という憧れが強かつたんです。実家

で働きだしてから、なんとか両親を説得してイギリス留学したりしてました（笑）。不思議なもので、それまで海外にはかり向いてた興味が今は日本のほうに。外の世界に何度か触れることで、寂寥である日本の伝統文化の素晴らしさを再認識するきっかけになつたんです」

「小丸屋」のルーツは江戸。寛永時代から代々團扇商を営んで来たが、明治時代、4代目のころから扇子も扱うようになる。もともと芸事が好きで家系で、6代目は常磐津や長唄をたしなみ、志帆さんの大祖母は5歳で日本舞踊の会主をつとめ、天才少女と謳われた。そして、8代目が舞扇子を全国に持ち歩いて商圏を広げ、日本舞踊で使う小道具の製作や、貸し出しにも商売の幅を広げて、今日に至つて

「舞台小道具でわかりやすいのは、紙間の都をとりや、先斗町の鴛川おどりや、芸妓さん、舞妓さんが舞台で持つものといえ、いいでしょうか」

舞台小道具は、男の職人がひとつひとつ手作りで魂を込めて作り上げていく。店の2階が作業場になつていて、志帆さんがプロポーズ。年齢は志帆さんより4歳年下。姉さん女房になるわけだが、尻に敷くという感じでもなさそうだ。

「同じ屋根の下で働いていますが、お互いやってる仕事もわかって、多くを語らなくても理解し合えるよきパートナーです。2人で力を合わせて、伝統文化を伝えていこうと話合っています」

店を離れて名を残す。けれども、看板を背負つていくという気張った意識はない。

「古典を守りながら、新しい扇子のバリエーションを広げたい」

志帆さんは、匠の新しいデザインを制作中

小丸屋 ☎075-771-2229